母親というより、正に教育実践家！

HP（バックナンバー随想等関係（Ⅱ）P、2004 年 07 月 21 日「ある母親とのＨＰでの出会い」参照）で記載したお母さんからいただいた著書２冊（自閉症の息子と共に……①ありのままの子育て、②自立への子育て：ぶどう社）を読み終えた。

まず感想を一口でいえば、著者に先にメールしたように、やはり「子どもは、出会う母親により、その後の QOL が決まる」ということかな。

それにしても著者は、凄い！　母親の育児体験書というより、正に教育実践家！

子どもの行動の意味、心の機微を探り、その行動を尊重して規制することなく、それに対応する工夫・指導、検証までも具体的に詳細に記載されている（もちろ当人は、そうした意識で子育てしたのでないと思うが、それだけに、育児、教育における係わり合い方の本質と思われることだけに、凄い！）。例えば、強い拘り行動、超多動行動も、子どもの関心、興味の対象故と捕らえ、工夫・指導の糸口に置き換えての実践。

また、著者は障害者が地域で生きていくために、地域の意識を変えるために、自らの行動で開拓している。例えば、障害児親子に限定せずに、地域の方々を巻き込んでの色んなサークル、イベント等の企画・実践、また、積極的な「ご近所デビュー」や我が家を地域の子ども達へ解放、等々。

この著者の３０年近い時系列の実践の前では、如何なる教育学者、教育者といえど、また、自称福祉のプロという人も、圧倒されるであろう。そして、プロという前提が、子どもの日常活動の中では、色あせるものであることを気づくと思う。

「教育とは、その子どもの生きていること（生命活動拡大）に係わり合い、サポートする作業であり、それ故に日常生活の場面で具体的に指導することが、最も効果的で、かつ、その子どものエネルギーとして身につけ易い。また、障害という概念は、往々にして周りの作り出している要因が多い。」と考える私としては、著者の３０年近い実践記録は、自説の裏付けとなるものだけに、読ませていただいて勇気をいただいた。

また、私は「コミュニケーション論」がライフワークと自認しているが、それも係わり合う中でも係わり手の姿勢という側面から検討しているだけに、著者（教育者）の工夫、実践は見事！という感嘆の言葉しか浮かばない。

私としては、障害児の親よりも、教育、福祉関係者に購読を勧めたい本である。

（2004 年 08 月 29 日 記）